

茅風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2016年5月23日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 48号



野焼きには技術がある

- 1月～5月前半の活動報告(事務局)1
- 第15回定期総会開催報告(事務局)2
 - ◆ 新年度執行体制及び新年度の主な活動計画・日程
 - ◇ 総会セミナー報告
 - 「森を切ったら草原に戻るのか」(講師・増井太樹)
- 一般参加歓迎プログラム 2015⑦3
 - 「茅仕事・雪原かんじき体験・キャンドルナイト」
 - ◆ 開催報告(草野 洋)
 - ◇ 参加者レポート(福島涼子)
- 流域連携と流域コモンズ活動報告5
 - ◆ 参加報告(稲 貴夫)
- 一般参加歓迎プログラム 2016①7
 - 「茅野の野焼きと早春の里山散策」
 - ◆ 開催報告(草野 洋)
 - ◇ 参加者レポート尾島キヨ子・守田裕子)
- 藤原現地報告(北山郁人)11
- 藤原の“ほっと”ショットコーナー(中村智子)12
- 協賛団体紹介 第二回「辰巳館」(清水弘毅)13
- 野守のつぶやき(清水英毅)14

編集後記 (敬称略)

■ 1月～5月前半の活動報告

【12月追加】

- 環境省「生物多様性保全上重要な里地里山」全国500か所の一つに上ノ原「入会の森」が選定される。

【1月】

- みなかみ町観光課に対して、昆虫等保護条例指定団体がまとまって報告会を行うことを提案、協議。(町役場にて他団体と調整、検討。)
- 18日 利根川水源地域ビジョン第3回懇談会に現地事務所が参加。
- 23日、24日 地域連携活動として小貝川および菅生沼の野焼きに延べ11名が参加。

【2月】

- 4日 国連生物多様性の10年・日本委員会中間年フォーラムに浅川事務局長が出席。2年前に認定を受けた「流域コモンズによってよみがえる“さとのくらし”」認定書を受領。
- 14日、21日 流域連携活動として、千葉県野田市の東京理科大学理窓自然公園で湿地再生、田んぼ造成作業に延べ9名が参加。

【3月】

- 12日、13日 一般参加歓迎プログラム⑦「囲炉裏端の茅仕事・雪原かんじき体験」実施。19名参加。
- 21日、千葉県柏市の麗澤中学校と5月実施予定の樹木観察会の打ち合わせ。

【4月】

- 9日 第15回定期総会を渋谷区内で開催。新年度事業計画案及び収支予算案等四議案について審議。
- 同日 総会終了後、セミナー「森を切ったら草原に戻るのか？上ノ原でわかった事とこれから」実施、講師は増井太樹会員。
- 16日、17日 2016年度第1回一般参加歓迎プログラム「茅場野焼きと早春の里山散策」実施。
- 30日 麗澤中学校樹木観察会下見

【5月】

- 7日 千葉県柏市の麗澤中学校樹木観察会。今年は139名の新1年生に自然とのふれあい、気づきの大切さをレクチャー。

(以上)

■第15回「定期総会」開催報告 新年度活動計画・日程とセミナー

◆事業計画をはじめ、新年度の方針が承認◆ —次のステップに向かって—

森林塾青水の第15回定期総会が、去る4月9日に東京都渋谷区の区立氷川区民館において開催され、昨年度一年間の活動を振り返るとともに、新年度の事業計画・予算案、また会則の一部変更などについて審議し、今後一年間の活動計画が承認されました。

また、総会では議事に先立ち、みなかみ町商工観光課の木樽晴彦氏に挨拶をいただき、4月1日付のみなかみ町の人事異動による木樽氏の自然観光グループのグループリーダー就任と、新しく当塾の担当となった同グループの小野里宏主査のご紹介を戴きました。

◆新年度執行体制 ～顧問・幹事・オブザーバーの紹介

塾長

草野 洋:全般統轄

塾頭

*北山 郁人:全般統括補佐、みなかみ事務所長、地元連携窓口、古民家再生・活用他

幹事

浅川 潔:事務局長

稲 貴夫:「茅風」編集長、東京楽習会他

岡田伊佐子:自然ふれあい学習他

高野 史郎:学監、自然ふれあい学習他

西村 大志:草原再生ネットワーク、草原サミット

増井太樹:事業統括(流域コモンズ・連携促進他)

松澤英喜:事務局長補佐(発信活動促進、会員管理、HP・ブログ、助成事業他)

*吉野一幸:地元代表、NPO奥利根ネットワーク、古民家活用・交流促進他)

米山正寛:コラボ／森林文化協会、発信活動拡充、流域コモンズ

監事

林部良治:会計(年会費、経理統括)

顧問

原剛、安楽勝彦、笹岡達男、滑志田隆、清水英毅
オブザーバー / 相談役

*小野里 宏:行政／みなかみ町役場窓口(観光課自然観光グループ)

*林 親男:地元／「上ノ原運営協議会」窓口(藤原案内人クラブ)

川端英雄:アドバイザー

*印はみなかみ町在住の役員です。

発足から15年を迎えた森林塾青水は、これからも「継続はチカラそしてタカラを作る」の理念のもと、上ノ原のフィールドを拠点に、流域全体との連携を大切にしながら取り組んでまいります。今年度の役員構成と事業計画はご覧の通りですので、引き続き皆さまのご理解とお力添えをお願い申し上げます。



写真上は塾長挨拶
写真下は木樽氏と小野里氏

◆2015年度の主な活動計画・日程

総会では、前年度の事業報告と収支決算とともに、今年度の事業計画と予算案が承認されました。定例活動をはじめ各種行事は、開催日の約一カ月前を目途にホームページに掲載する予定です。皆様のご参加を心からお待ちしています。

月	主な行事(一般参加歓迎プログラム・東京楽習会等)
4	・定例活動①山の口開き・野焼き/16(土)・17(日)
5	・定例活動②藤原の山菜を楽しむ/21日(土)・22日(日)
6	・流域連携活動:日光茅ポッチの会訪問/18(土)・19(日)
7	・定例活動③木馬道再生・防火帯刈払い・生き物撮影会/9(土)・10(日) ・東京楽習会①(未定)
8	・定例活動④藤原の地域行事と夏の生き物調査(未定)
9	・定例活動⑤ミズナラ林整備・生き物撮影会・木馬道整備(未定) ・東京楽習会②(未定)
10	・定例活動⑥茅刈り/22日(土)、23日(日)
11	・定例活動⑦茅出し・山の口終い/12日(土)、13日(日)
12	・東京楽習会③(未定)
1	・流域連携活動:小貝川、菅生沼の野焼き(未定)
2	・流域連携活動:理窓公園(東京理科大野田キャンパス)での湿地保全活動(未定)
3	・定例活動⑧茅スグリ・雪原カンジキ体験・キャンドルナイト(未定)
通年:茅生育モニタリング、生き物調べ、外来種駆除、車座講座の実施、地域貢献活動、その他	

**セミナー報告 「森を切ったら草原に戻るのか？
～上ノ原で分かったこととこれからについて～」**
講師：増井太樹（岐阜大学津田研究室）

今年の総会では、当塾幹事であるとともに、現在岐阜大学の津田研究室で草原の研究に取り組んでいる増井太樹氏より、表記のテーマでお話をいただきました。話の中心は、上ノ原のミズナラ林伐採地において、増井幹事を中心に調査が進められている森林から草原への人為的な遷移についての調査に関するものです。テーマはまさに、里山の保全と草原の再生、活用に取り組む青水の課題そのもの。参加者からは様々な質問があり、非常に有意義なセミナーとなりました。

増井幹事からは最初に上ノ原草原の特徴とともに、これまで実施してきた温度測定実験の結果を踏まえ、草原の野焼きを「カツオのたたき」に譬えながら、地表部分も最大五分程度、最高300℃代の温度上昇で、地中の

温度は上がらない草原の野焼きが植物に与える影響について話がありました。

続いて、上ノ原ミズナラ林伐採地での調査

研究の目的について話がありました。上ノ原以外でも草原再生に向けた取り組みが各地で行われていますが、草原再生のメカニズムは、意外にもいまだ解明されていない部分が多いそうです。そこで、四十年前までは草原であった上ノ原のミズナラ林を現在のように伐採したあと、そこにどのように草原性の植物が侵入してくるのか、そしてどのような植物が残存して群落となってゆくのかを調査してゆくことで、草原再生のメカニズムを解明することが、本調査の主要な目的なのです。

そのメカニズムには、

- ①土の中に眠っていた種子が伐採後に生育する
- ②林内で生存していた種が、伐採後に生育する
- ③林外から種子が散布される

という三つのパターンが想定されるとのことですが、航空写真からも、明らかに40年前までは草原であった上ノ原のミズナラ林で、このような調査を実施することの大きな意味を確認することができました。

そして2014年からの始められた現地での細かな植生・モニタリング調査の結果をもとに、現在において推定される事柄についてお話がありました。それによると、40年前までは草原であったにも関わらず、ミズナラ林伐採前の林内には草原と同じ植物は殆ど確認できませんでしたが、伐採の翌年には優占種に大きな変化は無かったものの、草原性植物の僅かな増加が確認されたとのことでした。

草原再生のメカニズムを解明するには、今後、さらに長期的でキメ細かな調査が必要ですが、そのためには今後も伐採区の管理を継続してゆくとともに、上ノ原に関わる大勢の人たちが楽しく汗をかきながら、そしてある程度の精度のある調査が必要とのことでした。今後、青水が茅場とともに、この試験地とどのように関わって行くべきか、課題とともに期待と希望が湧いてくるセミナーとなりました。ミズナラ林伐採地の調査研究については、増井幹事より改めて茅風通信などで報告をいただけるとのことですのでご期待ください。また、西村幹事との共同による、上ノ原の植物と人との関わりに視点をおいた図鑑の作成計画の話もありました。青水の今後の活動とも大きく関わる計画であり、できる限りの協力をしてゆきたいと思います。（報告 稲）

**■一般参加プログラム⑦「囲炉裏端の茅仕事・雪原かんじき体験、キャンドルナイトお手伝い」
開催報告 & 参加者レポート 草野 洋**

2015年度最後の定例活動は、3月12日、13日の両日、地域イベントに合わせて行いました。参加者は19名、うち、お母さんの一人に付き添われた小学6年生（女の子）3人が卒業旅行を兼ねて参加、お祖母さんに付き添われた孫（3歳と6歳の姉弟）も参加して平均年齢をグ〜ッと引き下げました。そのほかのメンバーは会員とリピーターでした。

今回の活動では自然現象に驚愕させられ、子供たちの成長を知らされました。

まず、積雪が極端に少なかったこと。

雪の少ない冬と聞いていましたがそれでも上ノ原は2m近いだろうと思って現地に行ってみると広場で20cm程度、いつもは屋根の部分だけしか見えない看板が全部見える状態です。全体を見回すと斜面は地面が出ているところもあります。これほど少ないとは想像を絶します。

もちろん、藤原集落内もまるでいつもの野焼きの頃（4月中旬）の様子。村の古老の言葉を借りれば「おいら 80年ちょっと生きていますがこの雪の少なさは100年以上ぶりじゃなからうか」

今年は春が極端に早く、4月に予定している野焼きのための除雪も必要ないでしょう。その分万全な態勢で臨まなければなりません。

つぎに、参加者の中に、小学低学年のころ時々参加してくれていたSちゃんがありました。久しぶりに会った彼女は、身長も



例年は屋根の下まで雪

伸びてこの春には中学生。もう一つ、地元に移住したNさんの長男Mちゃんの自然児を地で行くリズム感あふれるファイヤー・パフォーマンスが圧巻の出来、K、S姉弟も秋の茅刈の頃よりずいぶん違います。子供の成長ぶりに驚かされました。



でしたが、夕食後、再び訪れ、点火されてグレンデに浮かび上がった「みなかみ 10 t h」を見たときの感激が大きく報われた気持ちになりました。

イベントはこのあと、プロ集団、GROPIKA



さんのファイヤー・パフォーマンスと地元、藤原ファイターズのパフォーマンスが披露され、前述のMちゃん5歳の堂々たるダンスに万雷の拍手となりました。締めくくりは、打ち上げ花火、吉野さんや北山さんたちの企画力と行動力が今年も発揮されていました。

2日目は、大幽洞氷筋までの雪原トレッキング組と古民家での茅スグリ作業組に分かれて行動しました。雪原トレッキングは、小学生3人を含めて9人が参加しましたが、次の福島さんの感想をお読みください。

茅スグリ組は、幼児を含めて10人。一畝田古民家を使っての作業です。

まず、囲炉裏に上ノ原でNPOが焼いた木炭を使って火を熾します。ブルーシートを敷き、あらかじめ運び込んだであったボッチのスグリ作業を、藤原最後の茅草職人阿部惣一郎さんの指導で行いました。



はじめにお手本を示してもらいました。手順は、一握りの茅を取り、まず裏(穂の方)から鎌の柄で逆立たせ、次に元の方から刃を使って落として行き、茎と穂先付近の葉だけの状態にして束ねてゆきます。このように鎌の柄と刃を使い分けてのスグリ作業が本来のやり方ですが慣れないとなかなか難しく能率も上がりません。



そこで、この作業のために作った茅スグリ器を使ってみると出来栄えも変わらず意外と使いやすい道具でした。これは使えます。

茅スグリは、囲炉裏端に座ってやる藁仕事のイメージでしたが藁と違って草丈が高いため立ち作業となり、暖房は囲炉裏だけでしたが、作業中は寒さを感じないほどでした。1時間半ほどの短い時間でようやく10束を作り上げました。

この間K、S姉弟コンビは古民家の中を電車ごっこなどで駆け回り、マンションではできないドタバタが出来て大喜びのようでした。

この茅スグリ作業、今後はメニュー化しますが雨天時の作業にピッタリです。付加価値の高い茅束を供給できる可能性が広がりました。

11時半には今回の宿の民宿「樹林」から郷土食ボタと味噌汁が届きました。



茅スグりはここでやめて、囲炉裏端でポタを焼いていきます。やがてクルミ味噌の香ばしい香りが古

民家に漂う頃、トレッキング組が帰ってきて冷えた体を囲炉裏と味噌汁で温め、焼き立てポタをいただきました。

今回の活動は次世代層の参加により来る春のように躍動的で笑い声にあふれる情景となりました。(写真の一部は米山さんから提供いただきました)

10年ぶりの藤原

福島 涼子

久しぶりに、森林塾青水3月の一般参加歓迎プログラム「囲炉裏端の茅仕事・雪原カンジキ体験」に、参加させていただきました。今回は、12歳になる娘



の同級生2名を伴っての参加。大いにかしましい参加者でしたのに、優しく接していただきありがとうございました。プログラムの初日、娘たちはキャンドルナイト用のかまくら作りや蠟燭への点火を手伝わさせていただきました。雪の上に浮かび上がった幻想的で清らか



な灯と冬の花火。娘たちにとっては生まれて初めての美しい夜になったようです。2日目は、大幽洞までの雪原トレッキング。歩き始めの頃は動物

の足跡や熊が残したさくらんぼの食べ跡を見て喜んでいた子供たちも、大幽洞の真下の急な雪壁を前に「信じらんない」「やばい怖い」「頑張れない」等と叫び、足を震わせて怖がってしまいました。しかし、北山さんをはじめ皆さんが根気よく付き合ってくださいだったので、なんとか自分たちの足で踏破できました。一番震えていた女の子が帰京後家族に「マ

マとパパが想像していたのより、うんと急な崖だったんだよ」と、愚痴っておりましたが、その顔は自信満々のドヤ顔でした。

さて、我が家が藤原に初めてお邪魔したのは娘が2歳のときでしたから、我々母娘の藤原好きも今年でちょうど10年目です。10年前、「この藤原で最も深刻な絶滅危惧種は、子供」とお聞きしました。当時、私も周辺で子供の姿を見ることがなく、その深刻さを実感したものです。しかし、今年のキャンドルナイトで目にしたのは、絶滅を危惧された藤原の子供たちのファイヤーパフォーマンスとドヤ顔でした。子供パフォーマンスは6、7人いたでしょうか。ツルツルに滑る雪の上で、両端に火のついたバトンを操るその姿、絶滅を危惧するには生命力と躍動感に溢れすぎていました。そして大人から「火を持つと危ないからやめておこう」と言われなかった彼らを、東京っ子達が羨ましがっていました。

藤原は、子供をドヤ顔にさせてくれる場所なのかも知れません。楽しい2日間を、ありがとうございました。



■流域連携と流域コモンズ報告 稲 貴夫

青水が最上流域で活動している利根川の流域面積は、日本一の16,840平方キロメートル。関東地方の半分以上です。その流域では様々な自然再生の取り組みがあります。青水では流域連携活動として、1月は小貝川と菅生沼の野焼き、2月は千葉県野田市の東京理科大学理窓公園での湿地造成活動に参加しました。

◇小貝川と菅生沼の野焼きに青水が参加

【小貝川の野焼き 1月23日】

小貝川は栃木県烏山市の小貝ヶ池から関東平野を南流し、茨城県の取手市と利根町の境界で利根川に合流する、全長112キロメートルの河川。利根川の支流では鬼怒川に次いで2番目の長さです。野焼きの場所は常総市の水海道駅から徒歩15分程の小貝川右岸の河川敷です。

かつて、利根川の中下流域では、屋根材や家畜の飼料などを得るための草刈りによって、ヨシやオギなどの草原が維持されていました。それが河川の改修などによって洪水による自然の攪乱も少なくなり、暮らしの変化によって草を刈ることも無くなると、植物の生育環境も変化して、タチスミレやヒメアマ

ナ等、草原固有の植物の絶滅が危惧されるようになりました。そこで野焼きという人為的な攪乱によって草原を維持し、希少植物の保全を図るのが「小貝川の野焼き」の目的です。

小貝川の野焼きは、地元の水海道自然友の会を中心に茨城県自然博物館などの協力で、昭和61年から行われています。この日は青水の会員、会友9名を含む総勢約60名ほどが午前9時に河川敷に集合。主催者挨拶に続いて作業内容や注意点の確認がありました。

その後、参加者は熊手やレーキ、刈払い機を使って防火帯を整備に汗を流しました。そしていよいよ火入れです。

野焼きは天候に左右されます。この日は風がほとんどない穏やかな天気で、火は中々広がりません。途中で消えてしまうこともあります。それでも背の高いヨシが密集して生えている場所では大きな火が上がり、熱風が押し寄せます。消火用のジェットシューターを背負った学生たちも気を引き締めます。



燃え残ったところ部分は枯れ草を集めて焼くなどしながら、順番に三カ所での野焼きを進めていきました。

【菅生沼の野焼き 1月24日】

菅生沼はヨシやオギが生い茂る232ヘクタールの湿地で、約五百種の植物が生育していますが、ここでもタチスミレなど十八種の絶滅危惧種が確認されているとのことです。

これらの絶滅危惧種を救うには、草刈りや火入れなどの人為攪乱が必要であり、そうした希少種を将来にわたり維持してゆくことを目的として、茨城県自然博物館を中心に地域住民や関係者によって野焼きが行われています。菅生沼の野焼きには青水会員2名が参加しました。

◇理窓公園の水田型湿地再生(2月14・21日)

利根川と江戸川を結ぶ利根運河は、明治時代に開削された日本初の西洋式運河です。都市部に残された希少な生物の生息場となっていますが、現在、周辺自治体や有識者、市民団体等で作る利根運河協

議会により、自然や歴史と調和した美しい運河空間を目指す「利根運河エコパーク構想」の実現に向け、様々な取り組みが進められています。

昨年からはまった千葉県野田市・理窓公園での湿地造成は、この遠大な「利根運河エコパーク構想」の一環として、理窓公園のある東京理科大学や東邦大学等により、取り進められています。



昨年造成された二つの池は、理科大生、東邦大生によってそれぞれ「つるまつ池」「うおまつ池」と命名されています。つるまつ池の「つる」は、コウノトリのことです。今回はうおまつ池の隣に二十坪程の水田型湿地を造成します。

まず14日は、対象区域の草刈りと用水路の掘削、浚渫作業です。青水からは5名が参加しました。

この日は前日からの悪天候を考慮し、集合時間が9時から10時に変更。まず教室で作業の目的と内容の説明、確認が行われ、11時くらいから現場に移動し作業を開始しました。この日は全国で春一番が観測され、昼前には太陽も復活し気温も上昇。草刈りの後は



泥掻きの作業となりましたが、長々靴や胴長をつけた学生たちが、汗まみれ泥まみれで作業しました。

用水路に溜まった泥をショベルで掻き出そうとしても、牛蒡のような根っこが蔓延っているのが邪魔で、上手く掘れません。ショベルの先で根っこを切断してやっ



と掻き出すと、泥が体や顔に跳ねてきます。21日は、いよいよ本格的な水田型湿地の造成です。青水からは4名が参加しました。

スコップで湿地にする場所の土を掘り返し、畔を築いてゆくとともに、湿地までの用排水路を切り開いてゆきました。ここも太く丈夫な根っこが張っており、スコップを駆使しながらの泥と根っこの格闘のようでした。

また、作業区域に面して散策路がありますが、その下に四、五メートル程のコンクリートの土管が埋められ、水路とつながっています。その土管の中に土砂が溜まっているため、水の流れがスムーズでないようです。そこで両側から竹の棒でゴシゴシと土砂を掻きだしてゆきました。



最後に土のうで水路の水位を上げ、湿地型水田に水を引き入れて、作業は終了となりました。

理窓公園水田型湿地や利根運河エコパーク・利根運河協議会の情報は、次のブログ・サイトをご覧ください。

- ・「理窓公園の観察日記」
<http://toneunga.blog.so-net.ne.jp/>
- ・「江戸川河川事務所」
<http://www.ktr.mlit.go.jp/edogawa/edogawa00183.html>

近い将来に、理窓公園の湿地にコウノトリが舞い降りる姿を見ることができのかもしれない。利根川流域全体にこのような活動が広がってゆけば、本当に素晴らしいと思います。

■一般参加歓迎プログラム2016① 「茅野の野焼きと早春の里山散策」 開催報告 & 参加者レポート

今年の上ノ原での野焼きは、全く残雪のない中での実施となりました。その実施にあたっては、町当局との真剣な遣り取りもありました。その概要を塾長の顛末記と、参加者の感想で報告します。(編集子)

2016 野焼顛末記 —残雪・雪山がなくても 知見・技術で克服— 草野 洋

野焼きにはいつもドラマがある。残雪が多すぎたり、少なかったり、異常乾燥、強風、近隣の山火事、住民の心配、火入れ許可者である町役場の過剰防衛などがそれである。

80年ちょっと生きているが、この雪の少なさは100年以上ぶりだべ」らしい。そのことは3月の定例活動の際に分かっていたことであり、雪が少ない場合の野焼きのやり方を始終頭に置いていた。3月に提出した火入れ申請書は、過去に4月に雪が降ることもあり前例踏襲で提出。野焼き2週間前、除雪が不要ということがはっきりした段階で具体的な方法を描いていた。

それでも、当日の天候次第であり、異常乾燥や強風で中止もあり得る。とにかく現場の状況把握が重

要である。前日、単身で上ノ原に乗り込んだ私の携帯に役場の担当者からの連絡が入る。嫌な予感がしたが案の定、此处からドラマが始まった。

「今年は雪が少ないので山火事の危険が高い、中止してほしい」との要請。予想はしていたが、「雪が少ないことは承知している、現場を見たか？ やる方法は考えている。現場を見て判断する」と返し、一緒に現場を見ることにする。

一足先について、全体を見回り、防火帯や道路に囲まれた十郎太沢から東南側の管理道から下部、つまりBブロックを焼くことに決



め、全体の可燃物の量、防火帯の状況を念入りに確認。可燃物は昨秋の茅刈量が多かったので比較的少なく、雪で抑えられ倒伏している。防火帯も昨夏に念入りに刈り取っていたので可燃物は少なく、類焼のリスクは低い。見ている間にも小雪が降る気象条件で枯草も湿り気がある。風ばかりはその時までわからないが、この状態であれば防火帯側から野焼き面に可燃物を掻き寄せて、不燃帯を作り、斜面上部から焼く縞焼きを採用することで安全に実施できると踏んだ。もちろん、100%安全とは言い切れないが消防団も出動してくれることになっている。雪はなくても野焼きの知見と技術でやれると確信をもって役場担当者を迎えた。

その後の実施に至るまでの経緯について



防火帯の刈払い



防火帯の可燃物の掻き寄せ

は青水のブログをご覧ください。最終的に青水として、両大学が設定している試験地の周辺、1か所0.3haの2か所、計0.6haに面積を縮小して防火帯、火入れのやり方でリスクを軽減する方法を提案し、その方向で行くとして、担当課長等

が明朝現場を確認することになった。「これで今夜は眠れる」と安堵したのはその時の正直な心境。

尚、神奈川から前日入りしてくれた、F夫妻と3人で、前日の作業を入念に行った。

まず、刈り払い機で防火帯と管理道の斜面下部5m程度の地面をなめるように刈り払う。遅れて到着したSさんには、防火帯の可燃物の掻き寄せを一部やってもらう。この作業は、明日の参加者が着火前に行う主な作業になる。

野焼き箇所を決めたBブロックでは、岐阜大の津田先生、筑波大の安立先生のグループが試験地の設定準備に余念がない。

防火帯の刈り払いに目途を付け、火付け棒、火消棒の準備が気になるもののこの日の作業は終了。

翌朝は本番、早朝より役場担当者5人が上ノ原で現場確認、防火帯、野焼きのやり方など技術的な説明とともに両大学のそれぞれの試験地の意義などについて説明してもらい、ようやく野焼き本番を迎えることができた。

さて本番、役場からの来賓（代理も）はなかったが頼もしい味方である消防団が駆けつけてくれた。始まりの式で30人ほどの参加者に経緯を説明する



とともに、今年の野焼きは塾の技術の真価が問われていり安全に一糸乱れず行動してほしい旨熱望する。そのあとの山の口開けではより念入りに

安全を祈願したことは言うまでもない。

野焼きのやり方であるが、Bブロックの三分の二を2つの小ブロックに区分するため各試験地の中間地点に臨時防火帯を設定して刈り払い、

参加者の皆さんに、従来の防火帯を含め可燃物を野焼きする側に掻き込む作業を行ってもらった後、風向きを考慮して初めに北西側（十郎太沢側）を焼くことにした。

火がコントロールできるように津田先生と私の2名だけが着火を担当し、他の方は、ジェットシューター、火消棒、レーキ

などをもって周囲を囲むように配置。斜面上部（管理道）から風向きを考慮して、臨時防火帯に沿って着



着火者は限定

火、臨時防火帯と野焼き面に焼け跡を作り徐々に斜面下部そして内側に着火していく

（縞状に焼失面を作っていくのでこれを縞焼きという）。消防団が管理道の上下に念のため注水してくれたので安全性はより高まり掻き込み箇所や臨時防火帯がきれいに焼け残って効果を示して終了。

南東側（カラマツ共有林側）の小ブロックは、本来の防火帯との間に間隔がある。焼く面の

境に臨時防火帯を作りたいが、時間をかけては風向きがどう変わるかわからない。このまま一気に焼いた方がよい。津田先生、増井さんと相談の結果、初めに焼いた小ブロック側は類焼の心配はないのでジェットシューターと消火棒などを持った人員を集中配置して、臨時防火帯は作らずに、斜面上部、風上から着火し、まず南東側に焼失面を帯状に作る焼失面防火帯方式をとることとした。

それを説明すると案の定、役場の担当者から刈り払い防火帯を作してほしいと要望があったが、野焼きの技術面を見せる必要もあって予定通り実施したところ焼失面防火帯が町道までつながり、それ以外には火は広がらず全体を焼くことができた。

火を着けると、火は焼かない面にも広



風上・斜面上部から着火



ジェットシューターを持って監視



頼もしい消防団の放水

境に臨時防火帯を作りたいが、時間をかけては風向きがどう変わるかわからない。このまま一気に焼いた方がよい。津田先生、増井さんと相談の結果、初めに焼いた小ブロック側は類焼の心配はないのでジェットシューターと消火棒などを持った人員を集中配置して、臨時防火帯は作らずに、斜面上部、風上から着火し、まず南東側に焼失面を帯状に作る焼失面防火帯方式をとることとした。

それを説明すると案の定、役場の担当者から刈り払い防火帯を作してほしいと要望があったが、野焼きの技術面を見せる必要もあって予定通り実施したところ焼失面防火帯が町道までつながり、それ以外には火は広がらず全体を焼くことができた。

火を着けると、火は焼かない面にも広

臨時防火帯が機能

がろうとする。そこにジェットシューターで水をかけると、そのエネルギーが減少して、その分のエネルギーは燃やす面に向かっていく。火の性質を知ったうえでのコントロールである。このとき、増井さんが言った「火にいかにか仕事をさせるか、どっちに向かわせるかだ、それはコントロールできる」との言葉が印象的であった。

野焼きは、よく失火で問題になる野火焼などと違い、火をコントロールして仕事をしてもらう技術である。塾は上ノ原の雪間焼だけでなく各地の野焼き



の現場で経験している知見・技術がある。日本の野焼き第一人者の津田先生やそのお弟子さんである増井さんがついている。

焼失面で防火帯 火に仕事させる それらが理解されていないことが悔しい。12年間も野焼きや茅刈などを行ってきた塾の活動を否定するかのような、現場を見て判断しない机上の懸念に心も身体も疲れた2日間であった。

塾は、ただ野焼きをやりたからやっているのではない。かつて集落の人が協働で行ってきた暮らしの中の人間活動に代わり、ボランティアという人間活動を通じて茅場を再生しているのであり、それが上ノ原の茅場という地域のタカラを生んだのである。

この上ノ原は、かけがえのない貴重な財産である自然環境並びに生物多様性を守り育てるため、「みなかみ町自然環境及び生物多様性を守り育てるため昆虫等の保護を推進する条例（平成23年3月18日条例第3号）」の指定地になっている。

http://www.town.minakami.gunma.jp/reiki/reiki_honbun/r264RG00000715.html

この条例の目的にもある生物多様性保全のために野焼きが重要であることを理解してむしろ防波堤になってくれるのを期待したのであるが・・・。

また、昨年12月には野焼きや茅刈によって生物多様性が保全されている地域として環境省の生物多様性保全上重要な里地里山500選に選ばれている。

http://www.env.go.jp/nature/satoyama/10_gunma/no10-6.html

ここ上ノ原で塾は営々と作業を続け、茅場らしい状態を取り戻させた活動そのものと成果の評価が問われた野焼きをめぐるドラマであった。しかし、残雪や雪山がなくても安全に焼けることを実証し、役場などに示すことができたのは一つの収穫で「実践に勝る説得力無し」である。

このような人間界の現場の状況を把握しない判断で上ノ原のニホンカモシカ、オオヤマザクラ、ヒト

リシズカ、ヒメシジミたちの賑わいに影響を与えてはならない

今後も、上ノ原の生き物たちのために、情熱や技術を駆使して様々な



雪のない野焼き 鎮火直前

課題を克服するとともに。地域や行政に適正な評価を得られるように自己研さんに励まなければならない。

継続はチカラ、そしてタカラをつくる。

人生初の野焼き

守田 裕子

日本野鳥の会の上原さんにお誘いいただき、野焼きに参加いたしました。野焼き後の状態は阿蘇山で見たことがあるものの、参加は勿論初めて、そして藤原を訪れるのも初めての大変貴重な2日間でした。

前日までではイメージがさっぱり湧かず、美しい場所とお聞きしているので晴れたら良いなあ、という、ホンワカとしたものでした。当日、現場へ到着し、厳かな山開きの後の草野さんのご説明を伺ううちに、野焼きという伝統行事の、生態系保全における、また伝統建築物保全における環境的文化的意義を知りました。そして、火の恐さを学びそれを扱う技術の伝承という大切な役割を、使命感を持って担っておられるのだなあ、と、草野さんのお話しからひしひしと感じました。

丁寧な刈り払いの後、いよいよの火入れでは、詳細で背景のわかりやすい段取りご説明の下、一気に緊張が高まりました。じりじりと燃え進む火の音と炎、その熱の、キャンプファイヤーや暖炉の火とは全く異なる乱暴な感覚に、ただただ緊張するばかりでした。防火帯を作り火を付けていく場所や順番や焼き方（縞焼き）をコントロールして思うとおりの方向に進める知識と技術は、消滅してはいけないとても貴重な文化だと強く思います。宿のお料理も大変美味しくいただきました（特に山菜!）。

2日目の里山歩きを楽しみながら、現代の課題は、私たち人間が自然からどんどん離れていっていること

にあつて、社会的な構造のところでもっとみんなの意識を自然に戻していかないとならないんじゃないかという危機感を、



あらためて感じました。

今回連れてきてくださった上原さん、間邊さんをはじめ、青水塾のみなさま、藤原のみなさま、この素晴らしい伝統行事をサポートされるみなさまに、心より感謝と声援をお送りいたします。



また機を見つけて参加させていただきたいと思います。どうも有り難うございました。

初めて、真剣に野焼きした 尾島 キヨ子

「尾島さん」、呼ばれたのは野焼きの現場に移動して、塾長がやり方を説明している時でした。続いて「ジェットシューター大丈夫だね？」と。ほんの一瞬の間を置いて、すぐ「はい」と返事をしました。それまで参加した野焼きは2カ所で計5, 6回。勿論ジェットシューターは、毎回登場して活躍していました。が、それを背負うのはいつも若手の慣れた人のイメージで、66のオバサンとは関係ない作業だと思っていたのです。ジェットシューターとは水を入れる防水袋です。それを背負い、底につなげたホースから出た水を、手元のパイプを操作しながら火に向けてかけ、火をコントロールするものです。

私がそれを背負う事になったのは、地元で100年に1度の事と言っている雪の少なさからです。それまでは4月でも茅原は雪で覆われていたので、除雪し、その雪で防火帯を造っていました。“日本一安全な野焼き”等といわれ、勿論、ジェットシューター隊も杉葉の火消し隊もいたが、そう真剣に活躍しなくても済んでいました。見物は雪の山から見下ろし、正に高みの見物だったのです。が、今年は一片の残雪もなく、枯れて雪に押しつぶされた茅原が広がっています。そんな例年とは違う状況に、野焼き前日に町と実施するしないでの厳しいやり取りがあったのです。その結果の実施だったので、皆、安全の為、手順をしっかり把握し、緊張して作業に向いました。いつもは数人の着火隊だが、着火棒を持つのは火のコントロールを知る塾長と100ヶ所の野焼きに関わった津田先生のみ。そして、私も参加したジェットシューター隊は17人。いつもは5人以上10人以下だったような… 関心がなかったのが記憶も曖昧です。これだけのジェットシューターを集めるのは大変だった事でしょう。袋に書かれた所有団体名は3種類ありました。

私が参加したことのある野焼きは青水の上ノ原と、小貝川の河川敷です。小貝川はオギで、積雪がないので立枯れです。火を着けると忽ち燃え上がり、炎

は最高で10メートル程になり、火はす〜っと通り過ぎオギ原は忽ち黒い地面に変わります。10メートル以上離れていても結構な熱さです。一方、例年の上ノ原は茅が寝ている上に、雪の下だったので湿っていてそう炎は揚がらないし、燃え広がるスピードも小貝川のように行きません。上ノ原の野焼きを復活して10数年、町に野焼きの経験者は少なく、況して、例年と全く違う茅場に町が二の足を踏むのは理解できます。その上、嘗て茅場でのBBQの火の不始末で火事になったとか、もっと以前には山が1週間燃えたとかの記憶もあって実施に賛成できなかったのでしょうか。しかし、焼く事によって生物の多様性が保たれたり、増したりするのです。その事が町の財産にもなります。事故が起きるのは火の扱いが間違っているからだ塾長や津田先生が言っていたが、私もそう思います。野焼きからはちょっとずれますが、私のブログのテーマ説明欄には下のようになります。火という相手を知り、うまく付き合うのは、人の能力としてとても重要だと思います。

～火(ひ)、土(つち)、水(みず)、～
これらはとても美しく、また怖いもの。人が育つ上でなくてはならない重要なもの。私はそんな風に考えます。

本番。2区画に区切ったが、大勢で1区画ずつゆっくり実施です。上の道路、レーキで枯草を掻いた防火帯に、焼く範囲の2辺を囲むようにずらりと並んだ17人。上から火が入ると、煙が立ち、ジェットシューターを背負った増井さんが斜面を駆け上がり駆け下り、大声で指示を飛ばします。私も火が斜面を少しずつ下ると共に移動します。「黒くなった所は燃えないから、水は無駄遣いしないで」の声。それは本当で、しばらく放水を我慢して火の行方を見ていると、まだ多少の枯草が残っている防火帯に行くのはそうなく、広がりそうな火に多少の放水をただけだった。黒い帯ができるとそれ以上は広がりにません。最初内側に向っていた風が途中からこちらに向って来ました。



白い煙が襲いかかり、隣の人も見えません。煙のない隙間を狙っては空気を吸います。焼けた黒いエリアが広がると共に少しずつ下ります。茅は寝ても、時として炎を巻き上げて燃えるので熱い時もあるが、我慢できない程ではないので、やり過ぎします。1区画目を終え、小休止の予定だったが、風の具合が良いとの事で、2区画目にすぐ移動。そこは防火帯を造っていません。『えっ』と思いました。

町から来ていた人も、異議を唱えています。しかし、塾長はそれに応えず野焼き開始。見ていた私達も、塾長の「ジェットシューターが防火帯」、「火はコントロールできる」の言葉に絶対成功させる覚悟を持って配置に着きました。本番直前に到着していた消防隊もホースを繋いで、繋いで、枯草の上に延焼防止の放水です。私は目の前の火を見つめ、時々全体を見回します。火が外側に出ないようにコントロールする役目だが、風向きが良く、慌てて水をかける場面は皆無でした。そんな事であまり水を使わなかった私は、途中で



水の少なくなった増井さんとジェットシューターを取り換えました。少ない水袋には中腹位まで下りた時に消防ホースから給水を受けました。この水は、最後のだめ押しで、再度全体を回った時にすっかり使い果たしたのです。

次の日はとても強い風でした。皆「今日だったら、だめだったね」と。当日の緩やかな風と塾長の的確な判断準備が今までで最高の野焼きになりました。そして、危機的状況に皆が心をつにした事も大いに後押ししたと思います。勢いよく燃える火は心躍るものだし、ゆらゆらと燃える火は心を癒します。そう言えば、私の青水塾との関わりは、塾の活動の新聞記事を読んで『火を見たい!』の気持ちから始まったのです。“野焼きらしい野焼き”に参加できたことを、当日の自然状況に、厳しい判断をした塾長に、野焼きに関わった皆に、感謝します。願わくば、許可を出す町も何カ所かの野焼きに参加してみても如何でしょうか。

■藤原現地報告

北山 郁人

みなかみ町藤原地区を拠点に活動するNPO法人奥利根水源地域ネットワークでは、移住定住促進の活動に力を入れています。藤原は、関東で最も雪の多い豪雪地帯で、周辺の集落から隔絶された陸の孤島のような集落です。奥州藤原氏の末裔が隠れ住んだといわれる歴史とロマンのある藤原ですが、人口は450人ほどで、藤原小中学校全校生徒はわずか18名です。この学校が維持できるだけの子育て世代が定住できる環境をなんとか維持していきたいと活動しています。昨年、移住支援のホームページ「Play-Fujiwara」を立ち上げ、空き家や仕事、田舎暮らしの情報、移住者や地元方の生活の様子などを紹介しています。昨年だけで、男性2名と1家族、計5名の方が藤原に移住してきました。近年、全国的に地方への移住や仕事の拠点を移すというニュースや

話題が多く見られるようになってきました。都内でも移住希望者を対象とした大規模なイベントが多く開催されています。一部の地方では、地域の特性や魅力をうまくアピールし、多くの若者が移住している所も出てきました。移住者がまた別の移住者を呼び込み、面白そうな場所、活気があるところには自然と人が集まってきます。我が家も、藤原がそんな場所に来ると確信して、7年前に移住してきました。首都圏からのアクセスの良さ、温泉やスキー場、豊かな自然、極端な四季の移ろい、



こんなに魅力的な場所は全国的にもめったにないと思います。しかし、藤原以外の地域住民は、「あんなところ人間の住むところじゃない」といいます。それが、また都市住民には「いったいどんなところだ?」と興味をそそります。実際、この自然環境の中で暮らしていくことが、

苦痛とを感じる人と楽しいと感じる人は、はっきり分けられると思います。地域住民の人間関係も濃密です。藤原に興味を持った方でも、100人中2、3人しか実際に移住できる人はいないでしょう。それでもいいのです。藤原はいいところだけでもう少し便利なおとりに住みたいという方は、雪のほとんどない駅周辺に住みながら藤原の自然を楽しむこともできます。新幹線通勤や2拠点居住もできます。さまざまなニーズに合わせたライフスタイルの提案ができるのも、みなかみ町の魅力だと思います。そこで、最も重要なのが、魅力的な空き家の情報です。実際、空き家はたくさんありますが、すぐに住めるような条件のいい物件はなかなかありません。みなかみ町でも空き家バンクの制度はありますが、まだまだ情報が足りません。さらに、空き家情報だけでなく、仕事や、暮らしの情報などきめ細かい対応ができる受け入れ態勢を整備し、活気ある地域を作っていきたいと思っています。



苦痛とを感じる人と楽しいと感じる人は、はっきり分けられると思います。地域住民の人間関係も濃密です。藤原に興味を持った方でも、100人中2、3人しか実際に移住できる人はいないでしょう。それでもいいのです。藤原はいいところだけでもう少し便利なおとりに住みたいという方は、雪のほとんどない駅周辺に住みながら藤原の自然を楽しむこともできます。新幹線通勤や2拠点居住もできます。さまざまなニーズに合わせたライフスタイルの提案ができるのも、みなかみ町の魅力だと思います。そこで、最も重要なのが、魅力的な空き家の情報です。実際、空き家はたくさんありますが、すぐに住めるような条件のいい物件はなかなかありません。みなかみ町でも空き家バンクの制度はありますが、まだまだ情報が足りません。さらに、空き家情報だけでなく、仕事や、暮らしの情報などきめ細かい対応ができる受け入れ態勢を整備し、活気ある地域を作っていきたいと思っています。

(平成28年4月29日上毛新聞 オピニオン21より)

■藤原の“ほっと”ショット・コーナー⑪
中村 智子

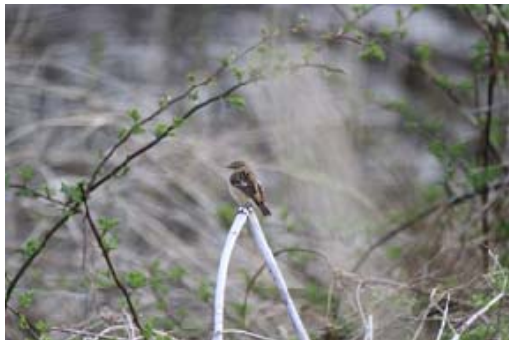
写真は、ごく最近の藤原にしました。リスの親子は、初めて撮りました。1カ月ぐらい早いと思います。季節によって、生き物たちも様変わります。今の様子を楽しんで頂けたら幸いです。(中村)



春になると田んぼで出会います(モズ)。4月1日



ホーホケキョでお馴染みのウグイス。4月16日



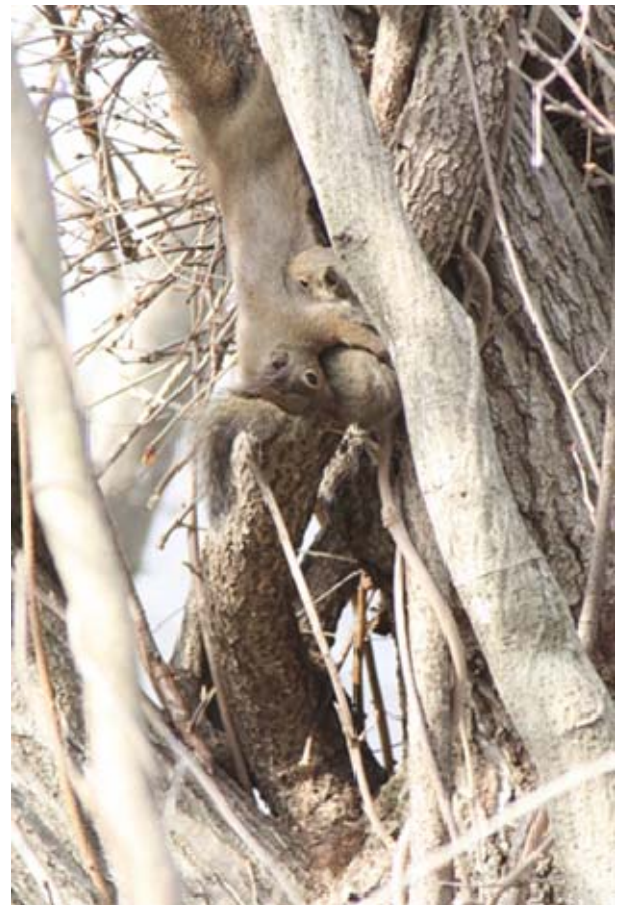
ノビタキが番いで西公園に飛んできました。4月16日



今年の桜はきれい。メジロが飛んできました。4月20日



カモシカのお母さんに会った。子どもは、藪の中。4月17日



親子のリスで、親が子供を銜えて移動する途中。4月25日

■協賛団体紹介(第2回) 上牧温泉「辰巳館」

森林塾青水の協賛会員として様々な形で活動にご協力いただいている企業や団体を紹介する本欄。第2回目は、上牧温泉「辰巳館」さんをご紹介します。

●辰巳館は“みなかみ18湯”として知られる上牧温泉で一番古く、その歴史は大正13年にさかのぼります。お宿の案内に「初代深津謙三が、利根川沿いの田畑の一部が毎年枯れていくのを見て熱源があると確信、当時では近代的な掘削法を試みたところ温泉がわき出した。しばらくは湯小屋を建て、村人たちに無料で利用してもらっていたが、昭和2年に至り開業した」とあります。

●爾来90余年、4代にわたり守り続けて来た名湯の看板は“温もりの宿”。その旗印『辰巳館三温』を体感せんと、山笑う4月下旬、お宿を訪ねて4代目深津卓也社長ご夫妻にインタビューさせていただきました。



Q『辰巳館三温』とは？

- ・体を癒す温泉の温もり～温泉で体の芯まで温まっていたいただき、ゆっくりと日頃の疲れを癒して下さい
- ・心が和む人との温もり～旅は情け人は心。皆さまの心のふる里になれるよう温もりのあるおもてなしを心がけています。



- ・旬を食す炭火の温もり～旬の食材各種を、地元産ナラの切炭で焼き上げます。炭火を囲んでのお食事は、ゆったり温かな団欒のひと時

を彩ります。

Qどんな旅館でありたいと思っていますか？

- ・お客様に「来てよかったね。また、来たいね」と言っていたりするような、いつも笑顔でお見送りできるような宿でありたいです(香代子女将)

Q人気メニュー、お勧めプランは？

- ・これから夏場にかけては「ホテル観賞のタベ」、「谷川岳～ノ倉沢エコハイキング」、天神平「星の観察会」など、地域の自然を生かしたプラン。
- ・当館一押しお勧めプランは専門講師付き「薬草、野草を知る観察会」。1泊2日で春秋2回、この5月の開催で第72回を数える人気プランです。

Q社長、女将として、常に心掛けていることは？



- ・「接人如春」～どなた様にも、常に春風のように温かく朗らかに接するよう心がけています。
- ・「挑戦と創造」～その継続に努めています。

Q森林塾青水への期待

- ・藤原での自然観察会などに、当館のリピーターさんを募って参加したいと考えながら未だ実現してなくて、心苦しく思っています
- ・しかし私は、当館の中にあるモノだけが商品とは考えておりません。周辺地域の奥深くに眠っている宝物を見つけ出して村起こしにつなげたいと思っています。青水塾が奥利根藤原で続けておられる活動への協働は是非、実現したいものです。

●インタビュー終了。夕食前にひと風呂浴びてとエレベータホールへ。浴衣がけの若いカップルと一緒に。「よく来られるのですか」と尋ねると、笑顔で「3回目です」。「何が良くて来るんですか」には、顔を見合わせて「何となく、温かい感じなんですよねえ」と。『三温』効果歴然を実感した瞬間でした。



●翌朝。見晴らし抜群の大食堂で、数々の地場産食材をベースにした「こだわり朝食」をゆっくり賞味。「見習社員」の名札を付けた初々しい新人二人が、交代で配膳に来てくれたので「志望動機・入社の決め手は？」と尋ねると、お二人とも「先輩たちがみんな親切で優しくかったからです」と。

『接人如春』が浸透しているなど納得、感心しつつ、地場産野菜や豚の源泉蒸し、尾瀬ざる豆腐に燻炭米ご飯、等々美味しく気持ちよく平らげました。実は、源泉蒸し「お粥」はお代わりさせてもらいました！



(以上、インタビュー&レポート担当=清水でした)

上牧温泉「辰巳館」

住所 群馬県利根郡みなかみ町上牧
2052

電話 0278-72-3055 FAX 0278-72-5553

<http://www.tatsumikan.com>

■野守のつづやき(7)

—冬から春、「守り人」仲間を訪ねて—

#

●「野守」の書初め

正月2日、孫たちと恒例の書初め。中央の縦長の太線は、今年の干支「申」の象形文字。その右側上は「人」、下は「虫」。左側上は「草」、下は「木」。上ノ原に入り会う動物や昆虫、草木と人間が仲良く共生していけるようにとの願いを込めたつもり。野守の思い、果たして孫たちは理解してくれたか？#



#

●鬼怒川源流で出会った「火守」 2月20～21日、「日光茅ポッチの会」(飯村代長)による“かんじき雪原自然観察会&メープロシロップ採取体験プログラム”に参加。鬼怒川源流域の栗山地区・土呂部集落に無尽蔵と言ってよいくらい沢山自生するカエデからメープルシロップを作る作業体験がお目当て。#



昨年、飯村代表から教えて頂き藤原でも試行済みだったので、大体のことは分かっている積りだったが、聞くと見るとでは大違い。学ぶ所極めて大であった。樹に穴を穿ち樹液(メープル

ウオーター)を採取するまでは簡単なのだが、それを薬缶や鍋などで時間をかけて煮詰め、糖度60%のシロップに仕上げる最後の段階が難しい。10lのメープルウオーターから出来るシロップは僅か250mlの割合。最後の詰めを誤ると、それまでの苦労が台無し。#

そこで、同会ではダルマストーブ上で煮詰める際に、その火加減を見る当番がいて「火守」と呼んでいる由。当日の「火守」は湯沢喜美江さん(地元会員)であった。こんな所にこんな「守り人」がいたんだと、とても嬉しい気分になった。#



中間産物たるメープルウオーターの活用も大いに参考になった。この段階での糖度は1.5～1.9%だが、



そのままウイスキーの割り水代わりにしたり、沸かして紅茶を淹れたりしても美味しいことを体験。これなら、自然の恵みをもっと大勢で分かち合えるというもの！#

●現代お花見考～「桜守」は不在？ 4月6日、蘆由紀子女史から下記メール受信。「今年も先週末、谷中上野 目黒川 隅田川と都内の桜の名所を巡りました。

十数年前とは、明らかに桜の勢いの劣化が顕著でした。これは我が身の感性、国力の劣化と比例していなければいいかと。桜の若木を育てるように国の花咲か爺(婆)にならなくては」と。以下、早速返信。「まったく同感。お花見で増えたのは、①老木 ②温暖化の背景にノ一天気な花見客 ③一気飲みで迷惑をかける若者たち ④バーベキューパーティをおっ始める外人観光客。いずれも、困ったものです。ついでに言えば、観光庁とか文科省とか行政の無為無策にも腹が立ちます」と。花見という日本の文化・環境を守る現代の「桜守」出でよ！



●有機無農薬の大西さんは「田守」！ 春爛漫の項、桜もさることながら、その樹下に咲くナノハナやムラサキハナナの配色の妙を満喫。そして、この時期もう一つのマイ・ブームは、柳宗民『雑草ノオト』持参のチャリンコ散策。だいたい味は、次々出会う可憐な草花たち。中でも最高に楽しいのは、有機無農薬米作りの大西さんの田圃(さいたま丸ヶ崎)。農薬も除草剤も使っていないので、畦は春の七草の代表格ナズナやハコベラ、ハハコグサなど野の花のオンパレード。そう、大西さんは安全で美味しいお米作りに加えて、草花のゆりかご作りをする「田守」でもあったのだ。



●森林文化協会『グリーンパワー』に当塾登場 4月号から、「守り人」連載コーナーに登場。草野塾長が健筆をふるい、3回シリーズで当塾の様々な活動を紹介中。

初回の見出しは「森を探して草原に出会った」。さて、当塾はどんな「守り人」として紹介されているのでしょうか？ 皆さま是非、同誌を手にとってご一読あれ。

春立てり野に一筋の水流れ 京子/日経俳壇

十郎太沢の雪解水を想いつつ... 平成28年卯月(青)

～編集後記～

『茅風通信』第48号をお届けします。原稿をお寄せくださいました皆様に感謝申し上げます。

誌面で紹介の通り、今年の藤原は春が早く来ました。三月のプログラムも、昨年とは違った環境でした。そして迎えた4月の野焼き。上ノ原に雪はありませんでしたが、青水はそこで貴重な経験を積むことができました。

先日、生態民俗学を創始された野本寛一先生から、お盆にご先祖様に供える花を野山から採ってくるのは子供の役割だったという伺いました。キキョウやオミナエシがその代表的な草花ですが、何れも草原性です。草原で子供たちが盆花を摘むかつての情景を思い浮かべながら、今年も上ノ原で、たくさん汗をかきたいと思います。(編集子)